

「アメリカ的キリスト教」と GODと呼ばれる神

藤井 創

ふじい・はじめ

酪農学園大学教授、専攻 組織神学、
宣教学、アメリカのキリスト教、主
著『世紀末のアメリカとキリスト
教』新教出版社一九九九年。

はじめに

アメリカは、五人に二人が、毎週教会の礼拝に出席するすごい国である。ほとんどの人が神の存在を信じている。彼らは神のことをGODと呼ぶ。大統領もキリスト者でないとなれない。それもプロテスタントに限られる。カトリックからはJFKという例外があるだけだ。大統領は聖書に手を置き、「God Bless America」といって国民を祝福する。そんなアメリカ人が最も信頼する社会組織は軍隊である。僅差で、警察と教会が続く。ということは、アメリカ人の信じるGODは「軍神」ということになる。確かに、初代大統領ワシントンは軍馬にまたがっていた。建国の初めから、大統領はアメリカ軍の最高司令官。歴代の大統領の名を冠した最強の軍艦が世界を席卷する。イラク戦争を仕掛けたジョージ・W・ブツ

シュは、キリスト者からは「ホワイトハウスでバイブルスタデイをする大統領」として評判がいい。何かがおかしい。イエスが、軍馬ではなく、小さなろばを好んだことを思い起す時、アメリカ人の信じるGODは、キリスト教の神とは違うのではないかという疑念が湧いてくる。この小論で、その問いに答えてみたいと思う。

一、九・一一事件で露になったアメリカの暴力性

わたしは、九・一一事件当時、アメリカにいて、アメリカ社会の暴力性を目の当たりにした。「旗を持ってないなんて恥ずかしいわ」。九・一一事件直後、白人女性がこう言った。あの出来事の後、星条旗があらゆる場所に翻った。ロバート・シューラー牧師のクリスタル・カセドラルは、九・一一

事件を知っていたかのように、その五日後の礼拝で、チャペルに高さ五〇メートル、幅二〇メートルもある星条旗を掲揚した。教会と国旗の融合、アメリカで最も成功している教会に巨大な国旗が揚がり、「God bless our native land…」とさんびかが歌われると、会衆は激しく感動し、報復の拳を振り上げていった。アメリカ最大のスポーツイベント、スーパーボウルでは、有名アーティストの国歌独唱とともに、スタジアムの上空を戦闘機が駆け抜け、一億人の視聴者を高揚させた。国旗、国歌、教会、軍隊、スポーツが渾然一体となったナシヨナリズムがアメリカ社会を席卷したのである。こうしてアメリカは、国民の圧倒的支持を受けてアフガニスタン攻撃へとなだれ込み、年末には、その年の顔として「アメリカ兵」が雑誌TIMEの表紙を飾ったのである。アメリカが、その後、イラク侵攻へと進み、イラクに劣化ウラン弾を撃ち込み、百万人を越える死者をもたらしたことは記憶に新しい。

九・一一後、ビリー・グラハム牧師がワシントンの追悼礼拝で行った説教を、ある人は「まるで軍艦に洗礼を授けるような説教だった」と言った。息子のフランクリン・グラハム牧師も反イスラム教キャンペーンを大々的に張った。父は軍艦説教で「我々キリスト者」を連発し、暗に「イスラム教徒はアメリカ人にあらず」を匂わせ、息子はイスラム教を悪魔的な宗教と断罪していった。そのような流れの中で、アラブ系住民やイスラム教徒に対する暴力の嵐が吹き荒れた。アラブ系アメリカ人が撃たれたり、殺されたりする事件が頻発。アラブ系キリスト者、韓国系キリスト者でさえ暴力を受けた。

キリスト者であっても、有色人種であれば大変な目に遭う、アメリカはそういう社会になっていた。

ブッシュ大統領の属するメソジスト教会の司教がアフガニスタン攻撃反対のテレビCMに出た時、教会内から「キリスト教徒はブッシュを支持している、司教は我々の宗教の声を代表していない」との批判が起きた。長老教会のトップもブッシュ大統領に親書を送って彼の指導力を称えた。長老教会は、六万四千人が軍隊に入隊し、三百人の牧師がチャプレンとして従軍しているからである。こうしてキリスト教と軍隊が表裏一体となった教会は、祈りをもって「神の軍隊」を地へと送り出すのだ。このようなキリスト者の態度に驚いてはならない。アメリカは、その建国の初めから、神の名によって軍事行動を繰り返し、世界に平和を造り出してきたと自負する国なのだから。

九・一一の後、アメリカは変わったと言われる。いや、アメリカは変わったのではない。九・一一という巨大な事件をきっかけに、本来持っていた「アメリカらしさ」——国内におけるホワイト・レイシズムという暴力と国外におけるミリタリズムという暴力——が表面化したのである。アメリカが国家予算の半分八〇兆円を軍事費に使うことを認めてきた国であることを認識する必要がある。ことミリタリズムに関しては、リベラル派も保守派も関係ない。アメリカ人はこぞつて、このような国家体制を支持してきたのである。国家予算の半分を軍事費に費やしながら、民主主義を標榜する国。このようなアメリカ社会と教会をどう見たらよいのか。ここで

は、アメリカのキリスト者を「キリスト者」として見る前に「アメリカ人」として見る視点が必要である。キリスト者である前に、彼らはアメリカの文化的価値観に支配されたアメリカ人なのだ。そう考えると、アメリカ社会とそこに生きるキリスト教の素顔がはっきり見えてくる。

二、アメリカの暴力の根源を探る

(一) 先住民への暴力

アメリカはなぜ国内外においてこれほどまでに暴力的なのか。問題のルーツは、アメリカの歴史の中にある。『民衆のアメリカ史』を書いたハワード・ジンは、アメリカの歴史を People (民衆——先住民、アフリカ人奴隷、メキシカン、女性、プアホワイトなど社会的弱者) の視点から繙いている。アメリカの思想的特質の上に肯定される暴力性は、暴力を行使する側ではなく、暴力を受ける側の経験と視点から検証されなければならぬ。

ジンは、ヨーロッパ系移民が入ってくる前のアメリカを以下のように表現している。「ヨーロッパ人は空っぽの荒れ野に移住してきたわけではなかった。そこにはヨーロッパのよいうに人口が密集している地域もあり、文化は複雑で、人間関係はヨーロッパに比べてより平等主義的で、男性、女性、子ども、自然が、おそらく世界のどの地域よりも美しく調和していた」。しかし、ジョン・ウエインの「馱馬車」に象徴されるように、西部劇では、先住民は白人の頭の皮を剥ぐ野蛮人として描かれる。ジンは、先住民の平和的な姿を記す。

「コロンブスの一行がバハマ諸島に漂着した時、武器を持たず、武器というものさえ知らない先住民は食べ物と水と贈り物を携えて彼らを歓迎した。先住民には目を見張るばかりの親切心と分かち合いの精神があった」。しかし、アメリカ大陸の発見は、そのような平和的な光景を暗転させる。コロンブスはアメリカにおける最初の軍隊の基地を建設し、さまざま先住民を砂金取りの奴隷として酷使し始め、ノルマを果たせなかった者の手首を切り落としていった。これがヨーロッパ人と先住民との最初の出会いであり、その後の両者の関係を象徴する出来事となった。この「暴力的な始まり」は、それ以降の五世紀の流れを決定づけるものとなった(1)。

ピューリタンを助けた先住民スクアントの物語に見られるように、先住民はヨーロッパ系移民に友好的であった。それにもかかわらず、両者の間に常に紛争が起きたのは、ヨーロッパ系移民が先住民に対して何らかの不正を行ったことから始まっている場合が多い。多くの先住民首長が大統領に面会を求め、平和共存を訴えたが、共存の道は閉ざされた。“Subdue the earth.”とのピューリタンの牧師の号令の下、ヨーロッパ系移民たちは、丘の上の町、国々を照らす真の光、未開の先住民族にキリスト教の祝福をもたらす神の使者として西進していった。彼らは、先住民を排除する政策に終始し、先住民と共存共栄していたバッファローの虐殺という暴挙にも手を染めた。二〇世紀を前に、数百万人いたアメリカ先住民は三〇万人になり、六千万頭いたバッファローはわずか五百頭になっていた。カウボーイがバッファローの頭蓋骨を積

み上げて作った三〇メートルはあろうかという骨の山の頂上に誇らしげに立っている姿は、西洋キリスト教文明の暴力性を物語っている。神の名によって地を従わせるとは、先住民の大量殺戮と徹底的な自然環境の破壊に他ならなかった(2)。

(二) 明白なる天命というレトリック

ヨーロッパ系移民は、イギリスとの戦いの末、一七七六年、一三植民地の独立を提案、独立宣言が起草され、アメリカ合衆国が誕生する。初代大統領はジョージ・ワシントン将軍。アメリカにおいては、革命戦争という武力行使が、独立の達成という形で民主主義と結びついた。アメリカでは、為政者の専制を許さないことが「規律ある民兵」という名の市民の義務となり、武力行使というDNAが、その民主主義の理念の一部として埋め込まれていったのだ。

一八三九年、ジョン・オサリヴァンはこう述べた。「アメリカは、よい行動をとるよう運動づけられている……われわれは心の中に、神の真実と、恵み深い目標と、過去に汚されていない明解な良心をもって、前人未到の空間に足を踏み入れつつある。われわれは人間の進歩のための国家であり、われわれの前進に誰もタガをはめることはできない、神意はわれわれと共にある」「わが国は、神の摂理の素晴らしさを、人類に対して示すことを運動づけられている……これはわれわれの高邁な運命だ。これを実現しなければならぬ——これがわれわれのこれからの歴史であり、この使命のためにアメリカは選ばれたのだ」(3)。ここから、Manifest Destiny

(明白なる天命)という高邁な理念が生まれ、一八四〇年代の領土膨張主義の象徴となり、その後のアメリカの歴史の中に脈々と流れ、実践されていった。建国まではアパラチア山脈の東までの国家、西部開拓、太平洋をカバーする海洋国家、そして、現在は中東イラクまで、アメリカはたゆまぬ西進を続けている。

明白なる天命とアメリカの西進に関して、アネット・コロドニーは、性と暴力とアメリカの大地の三者を結びつけ、この思想が植民地時代から形成され、男性の性的欲望がアメリカの歩みに投影されると論じている。植民・開拓時代の文献には、新大陸の自然の風景を「女性」にたとえる表現が多い。アメリカの大地は、同じ女性でも「母」ではなく、「処女」になぞらえられる(4)。神の名によって征服する土地を「処女地」と呼ぶアメリカ。イラク戦争の時、ブッシュ大統領がイラクを「Eve」と呼んでいたことは単なる偶然だろうか。オサリバンの言葉を、今ブッシュ大統領が語ったとしても何の違和感もない。明白なる天命という理念は、アメリカという国が持つ、強烈なアングロサクソンの選民意識、その裏返しとしての先住民、黒人、メキシコ人、アジア人全体への差別意識を大義名分化するレトリックとなり、キリスト教的ミリタリズムの強引な西進に今もお墨付きを与えている。

(三) 奴隷制民主主義から武装する民主主義へ

北米大陸における奴隷売買は、一六一九年、オランダ船がバージニア州ジェームスタウンに寄港し、二〇人のアフリカ

人奴隷を売ったのが最初だと言われている。興味深いのは、その翌年、ピルグリム・ファーザーズがプリマス植民地を建設し、それがアメリカ民主主義の始まりと言われていることである。アメリカの歴史はヨーロッパ系移民のための民主主義とアフリカ黒人の奴隷制の二重構造として進展していったのである。アフリカ人は一六一九年までに、すでに百万人以上が、南アメリカやカリブ海地域に輸送されていた。アフリカ大陸奥地で捕獲され、奴隷船に連行されるまでの数百マイルで五分の二が死亡し、Slaughter House (屠殺場) と呼ばれた奴隷船で大西洋を渡る間にさらに三分の一が死亡したという記録がある。床から天井までがわずか三十数センチ、寝返りも打てない空間で船に揺られる苦しみはわたしたちの想像を越えている。一八〇〇年までにさらに一千万〜一千五百万人がアメリカに運ばれた。「西洋文明の始まり」と呼ばれるこれらの世紀に、アフリカは五千万人を死または奴隷として失ったのである。

長きに渡る奴隷制に終止符を打ったのが、リンカン大統領と南北戦争である。銘記すべきは、アメリカという国が、奴隷制の問題を話し合いによって解決することができなかつたことである。南北戦争では、アメリカの戦争史で最大の死傷者を出した。アメリカという国の建国時にビルトインされた黒人差別の壁は、南北戦争という両軍合計で死者六二万人を出すという内戦によってしか乗り越えることができなかったのである。

南北戦争は、奴隷制を終らせる役割を果たしたものの、今

日の一大軍事大国の基礎を築いた戦争として、多くの負の遺産を残した。コルト回転式ピストル、ライフル、地雷、水雷、大砲、機関銃、装甲艦、潜水艦、有人気球などである。一八六五年、奴隷制は廃止されたが、銃の普及が一気に進行、一八七一年の全米ライフル協会の発足はアメリカを銃社会へと変えていった。近年、コロンバインで生徒による銃乱射事件が起きた時、映画「十戒」「ベン・ハー」主演の俳優チャールストン・ヘストンは、全米ライフル協会会長として演壇に立ち、「規律ある民兵は、自由な国家の安全にとって必要であるから、人民が武器を保有し、また携帯する権利は、これを侵してはならない」とする一七九一年の憲法修正第二条を楯に、銃による自衛の権利を誇らしげに宣言した。アメリカでは、武器の保持が「自由民」としての自衛上の権利であるのみならず、政治的な権利、つまり民主主義の権利の一つとして認識され、決して揺るぐことがない。アメリカは奴隷制を失ったが、それに代わる、よりよい暴力の手段を手に入れたのである。

(四) 人種隔離という暴力

奴隷解放の喜びも束の間、奴隷制よりもさらに卑劣な人種隔離政策が黒人たちを待っていた。人種隔離の時代とはリンチの時代である。建国後、拡大するフロンティアに行政や司法が追いつかず、共同体の自衛手段として自衛団による私刑が横行した。リンチは民間人による超法規的な暴力の伝統で、自警団が警察に代わって犯罪者を捕らえ、裁判所の代わりに

刑罰を与えるものであった。共同体の秩序の維持のため、共同体の多数意志に従って、少数の人間を排除するのだ。南北戦争後の一八六六年、KKKがテネシー州に結成され、不特定多数の一般市民による群衆リンチへとエスカレートしていった。群衆リンチとは、集団で暴行を加えた後、木に吊るし、火をつけるというもので、多くの場合、公開処刑として予告され、見せ物となった。ある南部の町では、町の住民が午前中に教会の礼拝に出席し、午後に、町の広場に集まって公開処刑をしたという記録もある。もちろん、こどもや女性も加わった。人種隔離政策とは、白人が自分たちの領域に垣根を作り、黒人を黒人の限られた領域に封じ込めて身動きができないようにすること、そして、黒人が白人の領域に入ってきた時に、リンチという制裁によって黒人を殺害するという二重の暴力体制であった(5)。

リンチは今もアメリカ各地で起こっている。KKKに代わり、警官が黒人をリンチする事件も頻発している(6)。リンチの国アメリカ。先進国の中で、いまだに死刑制度を残置しているのもアメリカだけである。

(五) 新たな人種隔離の時代

この人種隔離政策に風穴を開けたのは、ひとりの黒人女性だった。一九五五年、ローザ・パークスが人種隔離のバスで、白人に意図的に席を譲らず逮捕されたのだ。この出来事をきっかけに、黒人のバスボイコット運動が起こり、キング牧師をリーダーとした公民権運動が全米に広がった。非暴力で行

進する黒人たちに、白人たちが石をぶつけ、警官が棍棒で殴りつけ、放水で黒人をなぎ倒す様がテレビに映し出された。わずか半世紀前のことである。こうして、白人の激しい暴力に対して、徹底して非暴力で闘った黒人たちが勝利し、人種隔離の時代に終止符が打たれた。黒人たちの姿に触発され、女性、セクシユアル・マイノリティらが立ち上がり、社会的弱者がそれぞれの人権を取り戻していった。

しかし、一見平等になったかのように見えるアメリカの社会状況は悪化の一途を辿っている。経済格差という人種隔離の壁である。キング牧師は、公民権獲得後、初めてそれに気がついた。一九六五年のワッツ暴動が、ジョンソン大統領の署名からわずか五日後に起こった。ロスの黒人たちは言った。「キング博士、ここから出ていってくれ。われわれはあなたを必要としない」。ここでは南部の非暴力運動は彼らに全く意味をなさなかった。ジェームス・コーンは言う。「ワッツ暴動は、マーティン・キングのアメリカについての思想における主要な転換点となった。彼は、文字通り二つのアメリカが存在する」こと、つまり一つは美しく、豊かで、一義的に白人的なアメリカで、もう一つは醜くて、貧しくて、過度に黒人的なアメリカであるということを、理解し始めた(7)。豊かな社会の直中における「持たざる者」の怒り。公民権を勝ち取るうと夢見たキング牧師が、それを勝ち取った後に見た夢は「悪夢」だった。

世界で最も貧富の差が激しい、不平等な国アメリカ。上位1%の富裕層が30%以上の富を独占し、上位10%で80

%以上の富を分け合う社会構造が強固に維持され、黒人、ヒスパニックなど有色人種の貧困は極まっている。黒人に生まれると大学に行く機会はないに等しい。大学どころか、高校を卒業することも難しい。ヒスパニックはさらにその下に位置する。荒廃した公教育。スラムに生まれると一生そこを抜け出すことはできない。今日のパンを手に入れるために、麻薬や犯罪に手を染めるしかない子どもたち。数千万の無保険の人々。あの時、キング牧師が見た「もうひとつのアメリカ」は、今もアメリカの日常の風景の中にある(8)。

三、フリーマーケットという神

今はグローバリゼーションの時代である。グローバリゼーションの旗頭はアメリカである。そして、グローバリゼーションには軍隊が伴う。その目的が政治的力の防衛から経済的利権の確保へと移行しつつある現在、ミリタリズムはアメリカにとつてグローバリゼーション推進の武器である。ある人は「アメリカの真の神はフリーマーケットである」と言った。ミリタリズムはこの神の前に膝をかがめ、これにあらゆる仕方で奉仕する(9)。帝国主義、植民地主義としての有色人種の国々の抑圧と天然資源の奪取。その代償の上に立った大量生産・大量消費を加速させる物質主義は、今やアメリカが世界の富の三〇%を消費する現実を生み出している。そして、今、世界最大の埋蔵量といわれるカスピ海、海底油田の奪取を睨んださらなる武力の行使が中東地域を席卷している。ひとたび武力によって獲得された富はさらなる武力を蓄積し、

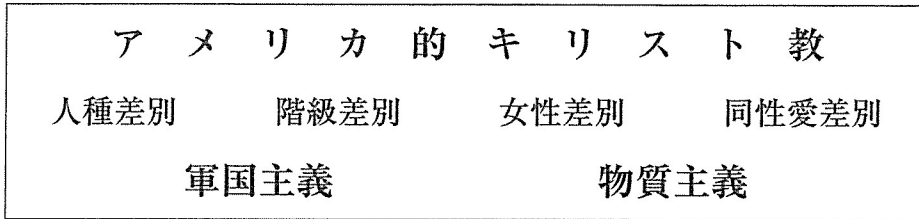
その武力はさらなる富を渴望する。富と武力はアメリカのコインの表と裏である。

一三二の国と地域に、七二五の基地を持つ「軍事基地帝国」となったアメリカは、有色人種諸国家の搾取と抑圧の手を決して緩めない。アメリカが爆撃を行った国は、第二次大戦後だけでも、中国、韓国・朝鮮、グアテマラ、インドネシア、キューバ、ベルギー領コンゴ、ペルー、ラオス、ベトナム、カンボジア、グレナダ、リビア、エルサルバドル、ニカラグア、パナマ、イラク、ソマリア、ボスニア、スーダン、ユーゴスラビア、アフガニスタン、そして再びイラク。これらはすべてアメリカの国益を守るために必要な価値ある軍事行動なのである。イスラム教徒や仏教徒の国々はもとより、ヨーロッパ諸国にも、これほど広範囲かつ継続的、破壊的に他国を攻撃する国は見当たらない。

アメリカは、イスラム教徒らしき人が爆弾をしかけたらしいと報道し、それをテロリズム、Violence(暴力)と呼んで非難する。しかし、その暴力への報復という大義の下、自らが利権を窺うために他国を空爆する時、それをForce(正しい力)と呼んで、胸を張る。アメリカの歴史の中に根づく明白なる天命という高邁な思想は、今、ViolenceとForceを巧みに使い分けながら、「我々はこんなに善人なのに、なぜ彼らは我々を憎むのだろうか。いったい、なんで」というブッシュ大統領の嘆きを共有しながら(10)、グローバリゼーションの網を世界の隅々にまで張り巡らせている。

Ⅳ The American Religion

九・一一事件の後、アメリカが、国内におけるホワイト・レイシズムと国外におけるミリタリズムという二重の暴力性を併せ持つキリスト教国であることが浮き彫りにされた。この小論では、アメリカの持つ暴力性の根源をその歴史の中に探ってきた。最後に、「アメリカ的キリスト教」のイメージ図を描いてみる。



キング牧師は昔、アメリカの文化的特質を、人種主義、極端な物質主義、軍国主義の巨大な三つ子と形容したが、わたしは「二親と四つ子の堅固な一枚岩」をイメージする。軍国主義と物質主義（大量生産・大量消費のアメリカ的ライフスタイル／フリーマーケット）という相思相愛の二親がどっしりと腰をおろし、その家の中を、有色人種差別、階級差別、女性差別、同性愛差別の四つ子が縦横無尽に駆け回っている。白人——男性——富裕層——異性愛者——プロテスタントという一枚岩の差別システムが厳然と存在し、有色人種——女性——貧困層——セクシユアル・マイノリティ——カトリック・イスラム教徒・ユダヤ教徒という社会的弱者を押さえ込む構図、これが「アメリカ的キリスト教」のイメージ図である。これは、イエスの生き様とは異質な、

アメリカの文化的価値観に基礎づけられた「アメリカの宗教の一形態」である。アメリカ人がGODと呼ぶ神は、キリスト教の神とは違うのではないかという疑問への答えがこれである。

わたしにこのような視点を与えてくれたのは、レスリー・ニュービギンであり、スタンリー・ハワーワスであった。インドという異文化社会で長く宣教師として働いたニュービギンは、イギリスに戻り、世俗化された母国の有様を目にした時、「西洋文化こそ、最も福音に敵対的だ」と断じた。彼の目には現代西洋社会は他のどの社会にもまさってキリスト教の福音に対して敵対的であり、西洋文明は教会の宣教にとつて最も困難な土壌に見えたのだ⁽¹¹⁾。また、スタンリー・ハワーワスは、一九八九年に『Resident Aliens』を発表し、アメリカの教会を「偽りのキリスト教」と呼んだ。彼は「真のキリスト教とは、アメリカ社会の文化的価値観や常識から決別し、その社会の中に独り立つ異星人になることへの招待である」と断言し、本来キリスト教とは何の関係もないアメリカの軍国主義、愛国主義、極端な物質主義、個人主義といったアメリカ的生活様式や成功第一主義を否定し、それらがあたかもキリスト教信仰から生まれたものであるかのような神話を打ち砕いた⁽¹²⁾。

このようなハワーワスの気づきは、地元ノースカロライナ州のキリスト教の砦と言われた町が、押し寄せる世俗化の波にのまれ、キリスト教色を失っていくという青年期の実存的経験から始まっている。アメリカにおけるキリスト教の世俗

化。しかし、ハワーワスにおいてユニークなのは、アメリカのキリスト教の世俗化の原因を、宗教改革を越えて、遙かコンスタンティヌス帝にまで遡って考察するところにある。キリスト教は、遙か昔、コンスタンティヌス帝の時代にすでに変質してしまっていたのである。ローマ帝国の為政者の宗教となったキリスト教は、イエスのミニストリー、初代教会の平和主義の立場から離れ、帝国の権力に迎合する強者の宗教に変わっていった。中世から近世にかけて他の宗教の追随を許さなかったキリスト教の不寛容と残虐さは、今やアメリカに受け継がれ、その恐ろしい暴力性を露呈しているのである。中南米やアジアの人々の多くは、帝国主義時代、キリスト教と武器とが車の両輪のようにして彼らのところによってきたことをよく知っている。香港の神学者ブイラン・コクは、アジアが非聖書的世界（キリスト教を拒否する世界）でありつづける由縁をその西欧キリスト教の暴力性の中に見ている⁽¹³⁾。暴力性のある宗教は信頼できないのである。わたしたちにとつて、アメリカの文化的価値観とキリスト教信仰が別物であることを認識することは重要である。なぜなら、アメリカ的キリスト教のイメージ図と日本の教会の具体的な在り方を重ね合わせる時、神をGODと呼ぶアメリカの教会の宣教によって建てられ、その影響を受けてきた日本の教会も、自らの内にアメリカ的キリスト教を温存している可能性を否定できないからである。

(1) Howard Zinn, *A People's History of the United States*, New York:

- The New Press, 1980, "Chapter 1: Columbus, the Indians, and Human Progress," pp. 3-16°
- (2) ドキュメンタリーフィルム *Earth and the American Dream*, Direct Cinema Limited, 1993°
- (3) 松尾文夫『銃を持つ民主主義：「アメリカという国」のなりたち』小学館、2004年、p.160°
- (4) 鈴木透『性と暴力のアメリカ：理念先行国家の矛盾と苦悩』中公新書、2006年、pp.5-6°
- (5) リンチに關しては Hilton Als et al., *Without Sanctuary: Lynching Photography in America*, Santa Fe: Twin Palms Publishers, 2005 参照°
- (9) Jill Nelson (ed.), *Police Brutality: An Anthology*, New York: W. W. Norton & Company, 2000 参照°
- (7) 梶原寿『み足の跡をしたいて：キング牧師における信仰のかたち』新教出版社、pp.119-121°
- (8) Chuck Collins and Felice Yeskel, *Economic Apartheid in America: A Primer on Economic Inequality & Insecurity*, New York: The New Press, 2005°
- (6) Arundhati Roy, "War is Peace," in Roger Burbach (ed.), *September 11 and the U.S. War: Beyond the Curtain of Smoke*, San Francisco: City Lights Books, 2002, pp.101-110°
- (10) ノーム・チョムスキー『ノーム・チョムスキー』リトル・モヤ、2002年、p.49°
- (11) Lesslie Newbigin, *Foolishness to the Greeks: The Gospel and Western Culture*, Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1986, p.3°
- (12) Stanley Hauerwas and William H. Willimon, *Resident Aliens: A provocative Christian assessment of culture and ministry for people who know that something is wrong*, Nashville: Abingdon, 1989, p. 12°
- (13) Kwok Pui-Lan, *Discovering the Bible in the Non-Biblical World*, Maryknoll, N.Y.: Orbis Books, 1995, pp.1-2°